

現代能歌劇「紅葉狩」台本・作曲：小菅泰雄  
原作能「紅葉狩」観世小次郎信光

第一場「戸隠山中景勝の地」  
時：平安時代 紅葉の秋の昼下り  
所：戸隠山中

序奏 (平維茂と清原成時・鶴丸が登場、ステージに列ぶ)  
三重唱 鹿狩りだ 鹿狩りだ 鹿狩りだ。  
維茂 木々の梢は紅葉に染まり、清・鶴 時雨に濡れてた鮮やかに 維茂 鹿の鳴き声聞  
きながら、紅葉に見とれ  
三重唱 鹿狩りだ。鹿狩りだ。鹿狩りだ  
維茂 風の向きに注意を払い。この弓できっと仕留めてみせる。  
三重唱 きっと仕留めて見せる。  
間奏 (錦木・栴・楓が登場、ステージに列ぶ)  
維茂 あそこに人影が見える。 誰だろう。  
鶴丸 尋ねてまいります。こんにちは。  
楓 こんにちは。  
鶴丸 そちらのお方は、どちらさまでいらっしゃいますか？  
楓 さるお方でございます。  
鶴丸 そうですか。さるお方でございますか (戻ってくる)  
女官が三人で、紅葉狩を楽しんでおいでですが、お名前を申されません。  
維茂 不思議だな。こんな山奥に。誰であれ、高貴な女官の紅葉狩だ。邪魔にならぬよ  
う回り道をしよう。(上手へ退場しかけ、立ち止まる)  
もみじ 栴  
錦木 奥ゆかしいお心遣いですね。  
楓・栴 の二重唱  
本当に。奥ゆかしいお心でございます。(維茂・清原・鶴丸、気づいて振り返る)  
維茂 紅葉狩りのお邪魔をしてすみません。私は平維茂、こちらは供のものです。  
錦木 私は錦木と申します。こちらは楓と栴です。今は身分を落として、こちらで淋し  
く暮らしております。道のべのついでに、どうぞお立ち寄りくださいませ。  
(維茂・清原、歩み寄る)  
維茂 これは、思いもよらぬお誘いを。  
三重唱 鹿狩りで山にきただけですから。  
維茂 紅葉狩のお邪魔にならぬように、このまま行かせて下さい。  
錦木 あたりは時雨に濡れております。雨宿りをなさってくださいませ。  
維茂 それではお言葉に甘えて、こちらで休ませて戴きます。  
錦木 どうぞ、お立ち寄りになってくださいませ。  
維茂 時雨に洗われた紅葉が、うつくしいですね。(床几にかける。清原と鶴丸は後ろ  
に立つ)  
錦木 紅葉は一段と山々を錦に染めています。  
錦木の Aria  
浮き世に長らえて、年を重ねてまいりました。住まいを訪れる人もなく、八重葎 (雑草)  
が生い茂っています。秋の訪れを淋しく感じ、庭の白菊も悲しみを誘います。涙ながらに  
秋空を眺め、夜露が一層錦を染めて、梢をわたる風の音にも人が恋しく思われる今日この  
頃でございます。  
楓の Aria  
一段と色深い 朝の紅葉  
澄みわたる秋空と 錦の色  
散りゆく紅葉に 我が身を重ね  
生きた歳月を 想いますます。  
清原 お三方とも、大変お美しいですが、都にお住まいでしたか。  
栴 はい。錦木様は幼い頃から読み書きに通じ、和歌を詠み、箏の弾奏に才能を示されまし  
た。都にのぼったある日、やんごとなきお方の御台所様が、四条河原で夕涼みをないま  
した。  
楓 錦木様の箏の音をお聴きになり、大変気に入られて腰元として召し抱えられました。そし  
て後日、錦木様はお館様の前でも精一杯、箏を弾かれました。  
錦木・楓・栴の三重唱  
お館様は箏の音に感激して、豊麗さに動かされ、錦木様をお誘いになりました。月日を経て、錦木  
様はお子を宿された。

清原 ほほうそれはそれは、都はさぞ華やかで楽しかったでしょうね。

アリア

美しい女官に誘われれば立ちもどる。女官の誘いは断れず、情けの酒は、深い契り。

維茂 互いに酒を酌み交わし、気恥ずかしくも思われる。ところは戸隠景勝の地。菊香る紅葉の別世界。

女声三重唱

巖の上の苔筵。紅葉を重ねてすわり、紅葉狩を楽しみます。

維茂 片袖敷いた女官の姿は、かぼそくて、

六重唱 紅さしたその顔に色香が見えて、胸うち騒ぎます。御仏の飲酒の戒め知りながら、女人と酒を酌み交わし、偽りの愛に心乱れ、嵐の中の山桜のように心は揺れ動きます。

維茂 深い情けと色香が見えて、ことの成り行き期待します。

楓 時は過ぎて、そよ風吹いて、はや月が昇り

女声三重唱

女官が、月の杯に酒を満たす姿は、

袖の袂が、舞う雪のように美しく、

苔の筵に、紅葉狩の別世界。

錦木 夢を覚まさないでくださいね。(もう一度のぞき込み)

錦木・楓・栴の三重唱

夢を覚まさないでくださいね。

(女官三人下手に退場。寺の鐘の音、徐々に暗くなる)

第二場「月夜」同じ舞台。

(維茂・清原・鶴丸が寝ている)。

鶴丸のアリア(中央奥に進み出る)

私は鶴丸と申します。八幡大菩薩が平維茂に戸隠山の鬼を退治するように命じて、この神剣を授けられました。この神剣をここまで届けた私は、八幡宮末社の神であり、平維茂の供の者です。

「平維茂よ、八幡大菩薩から受けた神の剣、この神剣を使って、戸隠山の鬼どもを退治せよ」。

「そなたに美酒を勧めていた女官は、実は、戸隠山に棲む鬼の化身であるぞ！」

「この神剣鶴丸をつかって、見事鬼どもを退治せよ」

(維茂の前に刀を置き、もとの席に戻る)

維茂 夢を見ていた。八幡大菩薩から授かった神剣がここにある。清原、起きなさい。

清原 ハッ！ 眠ってました。月があんなに高く昇っています。

鶴丸 女官の方たちがいませんね。夜も大分更けたようです。

(錦木・楓・栴が襷がけで再び登場)

錦木 おや、目を覚ましてしまわれたか。

清原 そのいでたちは、どうれた！

楓 私たちを成敗に来たのであろう。

清原 鹿狩りにきたと言ったではありませんか。

女声三重唱 いや違う！

楓 あなた方は都から来た回し者に違いない。

錦木 追放された私を成敗に来たのでしょうか。

鶴丸 追放されたのですか。

錦木 誤解されたのです。お仕えしていた御台所様の病が治らないのは、錦木の呪いだ  
と誤解されて、ここへ流されてしまいました。

楓と栴の二重唱

比叡山の高僧に御台所様の病が直らないのは、錦木様の呪いだといわ

れました。お館様は高僧の言うことを信じて、錦木様を戸隠山中に追放されました。

都の人たちに、錦木様は妖術使いだと思われてしまいました。

この時錦木様にはお館様のお子が宿されておりました。

錦木 今はお館様から授かった子と二人で、淋しく暮らしている身でございます。

鶴丸 妖術を使えるのですか。

錦木 そのような力はもっておりません。

栴 帝が錦木様討伐の勅命を発せられたそうです。

維茂 ならば、こうしたら如何でしょうか。

男声三重唱

鬼成敗。鬼成敗。鬼成敗。

維茂 夢で維茂は神剣を授かり鬼どもの成敗を命じられた

目を覚ましてみると  
 六重唱 雷火が轟き  
 維 茂 強風吹き荒れ  
 六重唱 強風吹き荒れ  
 維 茂 鬼が現れ  
 六重唱 鬼が現れ襲いかかる。  
 男声三重唱  
 鬼成敗。鬼成敗。鬼成敗。  
 維 茂 維 茂は少しも狼狽せず  
 六重唱 少しも狼狽せず  
 維 茂 南無八幡大菩薩と念じ  
 六重唱 南無八幡大菩薩  
 維 茂 神劍鶴丸を抜いて  
 六重唱 神劍鶴丸を抜いて  
 維 茂 鬼に立ち向かい  
 六重唱 鬼に立ち向かい  
 維 茂 見事討ち果たした。  
 六重唱 見事討ち果たした。  
 維 茂 このように帝に報告したら如何でしょうか。  
 五重唱 素晴らしい思いつきでございます。  
 楓 帝もご満足なさって、錦木様もお子様も、平穩に暮らせると思います。  
 六重唱 「東雲の空」  
 東雲の空 霧の中に朝日の紅  
 紅の朝日と 錦の紅葉 紅葉狩

維 茂 鹿狩りに来て、女官の方との紅葉狩りは、楽しかったです。  
 いずれ又、帝からの手紙をもって立ち寄らせていただきます。

男声三重唱  
 おもてなしをありがとうございました。

女声三重唱  
 こちらこそありがとうございました。

男声三重唱 さようなら

女声三重唱 さようなら

六重唱 さようなら 終わり